

4章においては、シュネムの女の出来事や、飢饉に瀕したイスラエル南方の地において、エリシャを通してなされた主の奇跡の御業を見ました。

1. アラムの將軍ナアマン (1~3節)

①ナアマン (1)「アラムの王の將軍ナアマンは、その主君に重んじられ、尊敬されていた。主がかつて彼によってアラムに勝利を得させられたからである。この人は勇士で、ツアラアトに冒されていた。」イスラエル民のために宣教をしていたエリシャですが、ここにはアラムの国の人が登場します。アラムは、お手許の地図にあるように、イスラエルの東に位置していました。イスラエルがアハブ王の時代に、アラム王ベン・ハダデとの間に抗争があったことは学びました。その時期には預言者エリヤが働いていました (I列王20章)。時代を経て、王も変わったアラムにナアマンという將軍がいました。彼は主君から重用されていました。というのも、彼は軍略に優れ、味方を勝利させる指導者であったからです。ここには勇士であったとありますが、兵士の士気を高める資質があったのでしょうか。ところが勇猛なナアマンが、ツアラアトに冒されてしまったのです。これは文語訳ではライ病と訳されていた病気で、重い皮膚病とも訳されています。しかし、新改訳では病状などの確定の難しさから原語がそのまま使われています。レビ記13~14章にはこの病気の確定については、祭司が行ったということが記されています (裏の絵を参照)。

②イスラエルの若い娘 (2)「アラムはかつて略奪に出たとき、イスラエルの地から、ひとりの若い娘を捕らえて来ていた。彼女はナアマンの妻に仕えていたが、」さて、アラムの国はかつてイスラエルに出動した時に、イスラエルの地から、若い女性を捕虜として連れてきていました。アラムに来てからは、ナアマン將軍の妻の召使いとして仕えていました。

③娘の助言 (3)「その女主人に言った。『もし、ご主人さまがサマリヤにいる預言者のところに行かれたら、きっと、あの方がご主人さまのツアラアトを直してくださるでしょう。』」彼女はイスラエルにいる時に、エリシャについて伝え聞いていました。私たちが2章以下でエリヤの後を受けて、主の器として、エリシャが奇跡に関わらせられてきたことを見てきました。彼女は女主人に「サマリヤにいる預言者のところにご主人様が行かれたら、きっとツアラアトは良くなります」と進言したのです。

2. アラム王の承認を得てイスラエルに向かうナアマン (4~6節)

①主君のところに (4)「それで、ナアマンはその主君のところに行き、



ツアラアトの判定 レビ記13章

イスラエルの地から来た娘がこれこれのことを言いました、と告げた。」妻から、イスラエルの預言者のことを聞いたナアマン將軍は、アラム王の所に行ったのです。そして、「イスラエルから捕虜として来ている娘が、こんなことを言っているのです」と言って、その人ならこの病気を治してくれるのではないかと、王に申し出たのです。

②アラム王の同意 (5)「アラムの王は言った。『行って来なさい。私がイスラエルの王にあてて手紙を送ろう。』そこで、ナアマンは銀十タラントと、金六千シェケルと、晴れ着十着とを持って出かけた。」アラム王はナアマンを、まだまだ重要な人物であると考えていたからでしょう。「行って来なさい。」と言ひ、政治的手法ではありますが、相手に受け入れてもらうために、預言者にではなく、イスラエル王に手紙を送ろう」と言ったのです。ナアマンはそれを受けて、イスラエルに向かいますが、その治療のためのお礼として、銀十タラント、金六千シェケルを用意したとあります。巨額というしかありません。晴れ着というのは当時、贈り物として用いられたのです。

③アラム王の手紙 (6)「彼はイスラエルの王あての次のような手紙を持って行った。『さて、この手紙があなたに届きましたら、実は家臣ナアマンをあなたのところに送りましたので、彼のツァラアトを直していただきますように。』」ナアマンが携えていたアラム王からイスラエル王への手紙は次のような内容でした。「家臣のナアマンはツァラアトに冒されていますが、ぜひとも治療していただきますように」。アラム王は相当に丁寧な気持ちでこれを記したと思われま

3. イスラエル王と預言者エリシャ (7~8 節)

①自分の服を引き裂き (7)「イスラエルの王はこの手紙を読むと、自分の服を引き裂いて、言った。『私は殺したり、生かしたりすることのできる神であろうか。この人はこの男を送って、ツァラアトを直せと言う。しかし、考えてみなさい。彼は私に言いがかりをつけようとしているのだ。』」ナアマンが携えた、アラム王の手紙に対して、イスラエルのヨラム王はこれを、素直には受け取りませんでした。彼は自分の服を引き裂いたというのです。服を引き裂くというのは、悲しみの表現としてなされることがあります。ここでは、怒りの表現としてなしています。彼は、言いました。「わしは、人の命を殺したり、生かしたりできる神とでもいうのか。アラム王はこの男を送って、ツァラアトを直せというが、アラム王はこのことを使って、私に何か言いがかりをつけようとしているのではないか。」と。アラム王は預言者への取次ぎのために、まずは王の顔を立てるといふ思いもあったわけですが、そのようにはとられませんでした。

②預言者エリシャ (8)「神の人エリシャは、イスラエルの王が服を引き

裂いたことを聞くと、王のもとに人をやって言った。」さて、エリシャは、イスラエル王が服を引き裂くほどに、怒りをぶちまけたことを聞いて、使いの者を王のところに派遣したのです。

③私のところに (8)「『あなたはどのようにして服を引き裂いたりなさるのですか。彼を私のところによこしてください。そうすれば、彼はイスラエルに預言者がいることを知るでしょう。』」そして、伝えました。病気の人を自分の所によこしてください。そうすれば、イスラエルの神の働きをする預言者が、神の恵みを実現するというところを知るのでしょうから。

《結論》この章にはアラムのナアマン將軍のツァラアトの癒しが伝えられていま

すが、今朝の箇所はその序盤です。將軍として優れていたナアマンがツァラアトに罹患して困っていたのです。そして、大切な部下の病にアラム王も同情して、イスラエルにいる賜物のある人のところに送ろうと努力したのです。

若い頃に、何人かで、東村山にあるハンセン病の療養施設「全生園」を訪問しました。そこのクリスチャンの方々とお交わりをしました。ハンセン病は主に皮膚や末梢神経が侵されて筋肉の萎縮、四肢などの変形、視覚障害などを起こすということです。もっとも、聖書のツァラアトは重度の皮膚病のことで、ハンセン病とは異なると考えられます。

今朝の聖書箇所からまず考えたいことは、ここにおいて、ナアマンは將軍という立場の前に、病気に苦しむ一人の人間であったということです。それに対して、イスラエルの王はあくまでもアラムの將軍という点からしか見ていません。預言者エリシャは、それを伝えて聞いて、苦しむナアマンを一人の悩める人として見ました。まずは、私どもも人と対する時には、その人の立場などから入っていくことも多いのですが、誰しもが神の前に罪人であり、苦しみ悩む弱い人であるという視点を忘れないようにしたいものです。

第二に、このナアマン將軍がイスラエルの預言者エリシャの所に来るにあたっての経緯のことです。つまり、ナアマンは妻の召使いとして働いていた、イスラエル出身の女性から、エリシャのことを伝えられました。ナアマンは、アラム王の承認を得て、イスラエルに来ました。その面で、この召使いの女性がいなければ、癒しの道は開かれなかったということです。

そこで思い出されるのが、エステル記にある出来事です。つまり、エステルは叔父モルデカイに育てられるのです。彼らはユダヤ人でした。そのエステルは、ペルシャ王であるアハシュエロスに気に入られて王妃になりました。ペルシャの要職ハマンは力を振るっていましたが、モルデカイはハマンの前にひれ伏しませんでした。ハマンはユダ

ヤ人全体を滅ぼしてしまおうと考えました。モルデカイはエステルに「あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためかもしれない」(4:14)と言っています。結局、エステルは用いられて、ユダヤ人は守られ、ハマンは柱にかけられたのです。まさに、エステルは、ユダヤ人たちを救うためにペルシャ王の王妃になったといえます。ここでは述べませんが、創世記のヨセフがエジプトに送られたのも共通の出来事です。

ここに出て来るイスラエルの女性も同じです。彼女はナアマン將軍がエリシャと出会うために、あらかじめ將軍の家で働くよう導かれたのです。

私たちにも、どうして自分が今ここにいるのだろうかとわからないことがあるかもしれません。しかし、そこには意味があるのです。主のご計画があるのです。私もなぜこの地に生きるのかを、理解できない時がありましたが、今はそれらが神の奇しいご計画だったのだと、受け入れています。讚美歌494には、「わが行く道、いついかに、なるべきかは、つゆ知らねど、主は御心なしたまわん。備えたもう、主の道を、踏みて行かん。ひとすじに」とありますが、アーメンです。「主の山の上に備えがある」と信じて進んで行きましょう。